

版画－『版』の「特性」と「機能」

About "Function" that 'Plate' has in potential and "Characteristic"

若月 公平

WAKATSUKI Kohei

This contribution work is the one exhibited in 「BANDED BLUE」(place:Tsuruoka Art Forum period:2005/9/16～10/2).

The work is composed of three parts.

1. 「One hundred prints from one plate」

40.0×30.0cm 100pieces 2005

etching, aquatint, dry point, on ganpi paper

2. 「One hundred traces on one plate」

40.0×30.0cm 100pieces 2005

etching, aquatint, dry point, on ganpi paper

3. 「One hundred expressions from one stroke」

40.0×30.0cm 100pieces 2005

aquatint, rubbing with pencil on ganpi paper

These works were produced based on a private doubt to the ideal way of this print of 20 years of a technological overemphasis to aim at the reproduction of the chart imaged image that graphic artists requested when the print was produced mainly.

The purpose is the one that "Function" that 'Plate' originally has in potential and "Characteristic" are reconfirmed before the print is completed as a picture.

1. "plate" about the function and the plural
2. "plate" bout the characteristic of production
3. Personal interpretation "plate" – the formless "plate" in brain

It produced in the copper engraving the subject of the above-mentioned three points.

はじめに

寄稿提示作品は「BANDED BLUE」(会場:鶴岡アートフォーラム 会期:2005 9/16～10/2) の出品作品である。作品は3点で構成される。

「一枚の版による百の刷り」

「一枚の版による百の痕跡」

「一筆の行為による百の表情」

この作品は、版画のあり方に対する私的な疑問が基になっている。疑問とは、ここ20年来の現代版画において各作者が求める図像的イメージの再現を主たる目的とする技術偏重の傾向が見受けられることである。作品の主眼は、絵画表現として一枚の版画が完成に至るまでに介在する『版』という「表現素材」が持つ独自性を再確認するものである。

1. 『版』の機能・複数性について

2. 『版』の制作上の機能について

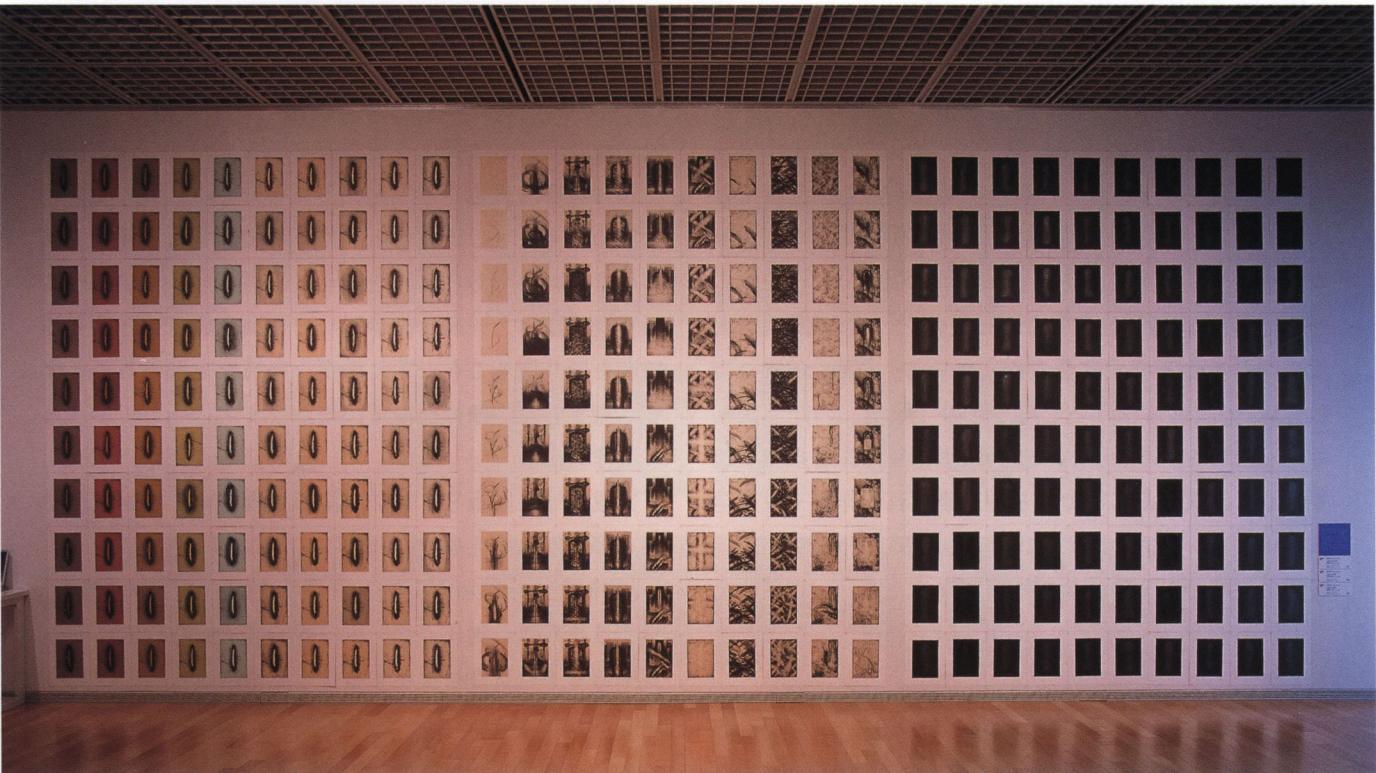
3. 私的解釈『版』－脳内における無形の『版』

上記3点を主題に銅版画で制作したものである。

現在の版画に関する私的疑問

日本現代版画の隆盛は、江戸時代の浮世絵版画、1904年に始まる山本鼎の創作版画運動、大正・昭和初期近代版画の創成期、「70年代の『版』概念の拡大を経て、「80年代以降表現技術の飛躍的進歩により国際展受賞を独占するほどの版画王国とも言われる。

現在の版画はその駆使するあらゆる技法により画面の視覚的密度が高まり、図上のクオリティーは「版」を用いた間接的表現であるにもかかわらず絵画としての重厚さが増すようになった。「80年代以降の技術的躍進は図



「一枚の版による百の刷り」2005年
シート、40.0×30.0cm、100枚組

「一枚の版による百の痕跡」2005年
シート、40.0×30.0cm、100枚組

「一筆の行為による百の表情」2005年
シート、40.0×30.0cm、100枚組

らすもそれを求めたものであり、国際的評価はその結果でもあった。また、そのことにより版画市場も拡大し複数芸術である版画は図像的クオリティーが高く均質な作品が数多に拡散した。これは版画にとって望むべき状況であったが、平面絵画として作者の私的イメージの再現性が高くなる一方、他にない表現素材として「版を以つて紙に刷り取る」という『版』の物質性が希薄になっているのではないかと、近年わたしの制作姿勢の中で疑問が浮遊している。

絵画表現としての「版画」

原版を通して紙等の支持体に写し取られた一枚の版画作品は作者の内的表現としてその図像やマチエールを観者に提示する。木版画、銅版画、リトグラフ等、版画特有の緻密な線、調子、形で表された画面は魅力的であり、観者を独特な世界に誘う。一枚の版画は平面作品である点では、他の作品と同様に絵画表現の鑑賞対象として觀られる。しかし、版画には他の絵画作品に無い幾つかの

「機能」と「特性」がある。

『版』の「機能」と「特性」

周知のことであるが版画は原版による印刷工程があるため複数の同一作品が生まれる。例えば、浮世絵版画は数知れず印刷され欧洲まで渡り、あるところでは包装紙の代わりにさえ使われた。原版から作品が複数生成されることは『版』のもつ大きな「機能」である。

また、一枚の版画はインクをつめた原版の上に紙を乗せ上から圧力を加えることで版の絵柄は紙に刷り取られる。作品として生まれる紙の表面は、終始作者の手に触れられることなく作品完成まで至る。作者が手を動かしもがき格闘するのは、製版や刷りをする原版の上のみである。この制作工程は、直接作品の上に手を施す他の平面作品と大きく隔たりを持つ「特性」である。

『版』における複数の同一作品を生む生産性を備える「機能」と版を刷るという間接的な制作上の「特性」は、一枚の版画が作者の表現世界として存在することと同様に版画において「表現素材」という点で見逃せない側面である。

写真上は「BANDED BLUE」展示の全体像である。次頁以降は前述の主題3点の詳細を制作方法も含め個々に記す。

1. 「一枚の版による百の刷り」副題「marks」

『版』の「機能」（複数性）について

複数性の部分と全体

版画にはエディション（限定部数）がある。作者又は画廊や版元の判断で20、30、50、100部と作品によって様々な限定部数が決められる。例えばエディション100ならその作品は100枚存在することになる。一枚の原版は100枚の作品を生み出す容量を備えている。『版』が持つ複数性は100枚刷られたところでその「機能」の総体が初めて示される。それぞれ一枚の版画作品は作者の表現結果として完成したものであるが、刷られた作品一枚は全体が100枚の一部分でしかないと捉えることが出来る。

版画には部分と全体が両極に同居する。

複数性とその均質性の是非

出版、流通の側面から作品の印刷状態に均一性、均質性が求められる。充分理解できることであるが、それが厳密になることで発生する弊害もある。作者が作品を刷る時に必要な自由さが失われることである。版にインクを詰め刷ることは版画用紙が作品に変容する厳粛な儀式のようなものである。例えるなら、原版は楽譜で刷りは演奏者の演奏。一枚一枚手刷りで作品を刷ることはその瞬間を刷り取ることであり厳密な均質性を求めるることは版に刻まれた図像の再現だけにとどまる。

＜制作方法＞

完成させた原版をインク、使用版画用紙、インクの詰め方等を組み替え100枚印刷する。

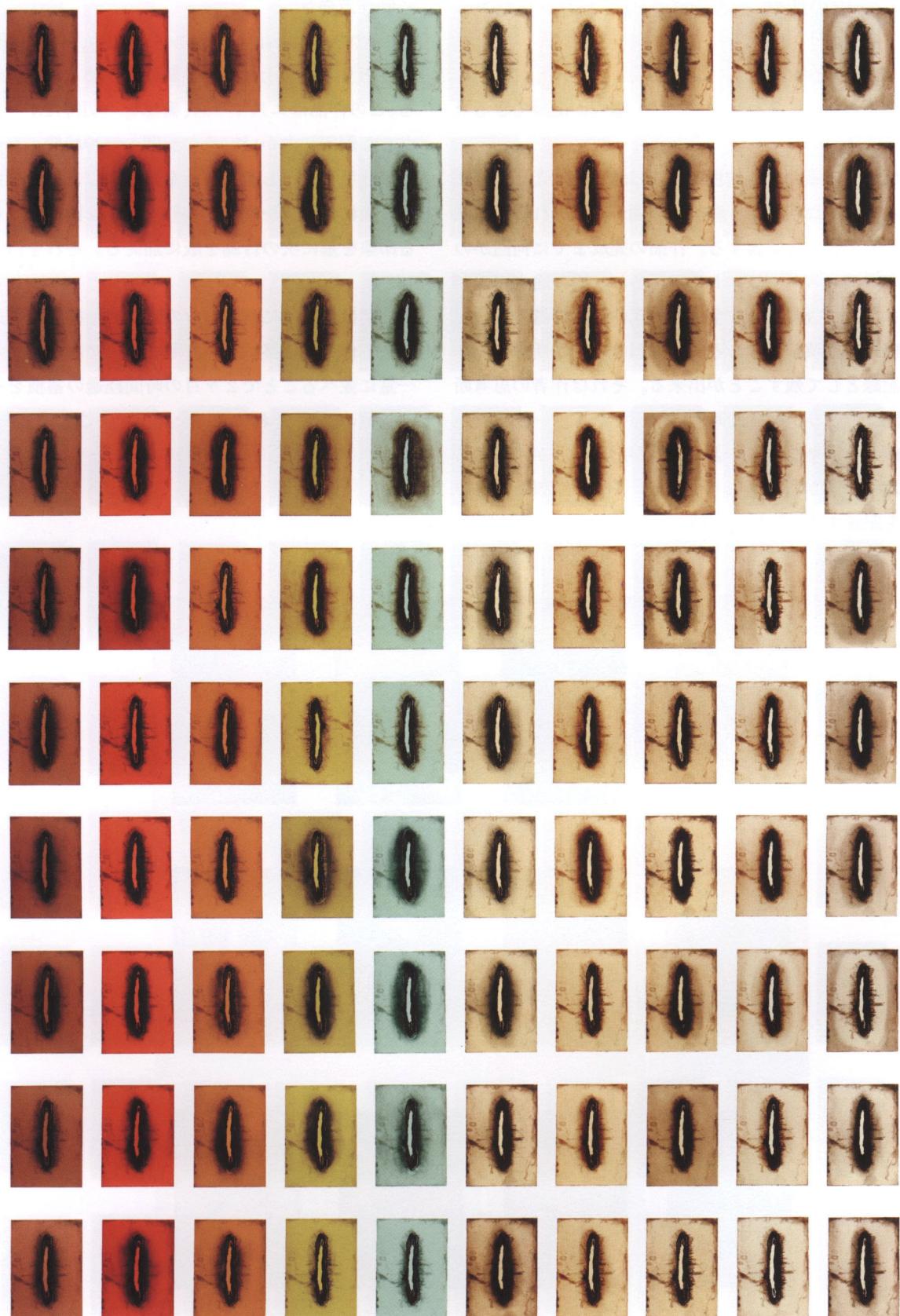
100枚全てを展示することでこの『版』が持つ「機能」である複数性の総体と、一枚一枚瞬間を刷り取ることの意味ある不均質性を提示することを目的とした。均質な100枚の刷りより苦労の多い刷りであった。



「一枚の版による百の刷り」2005年

1枚40.0×30.0cm、100枚組の部分12枚

紙にエッチング、アクアチント、ドライポイント、雁皮刷り



One hundred prints from one plate 2005

1 piece 40.0×30.0cm 100 pieces
etching, aquatint, dry point, on ganpi paper

吉田 謙二郎

2. 「一枚の版による百の痕跡」副題「infinity」

『版』の制作上の「特性」について

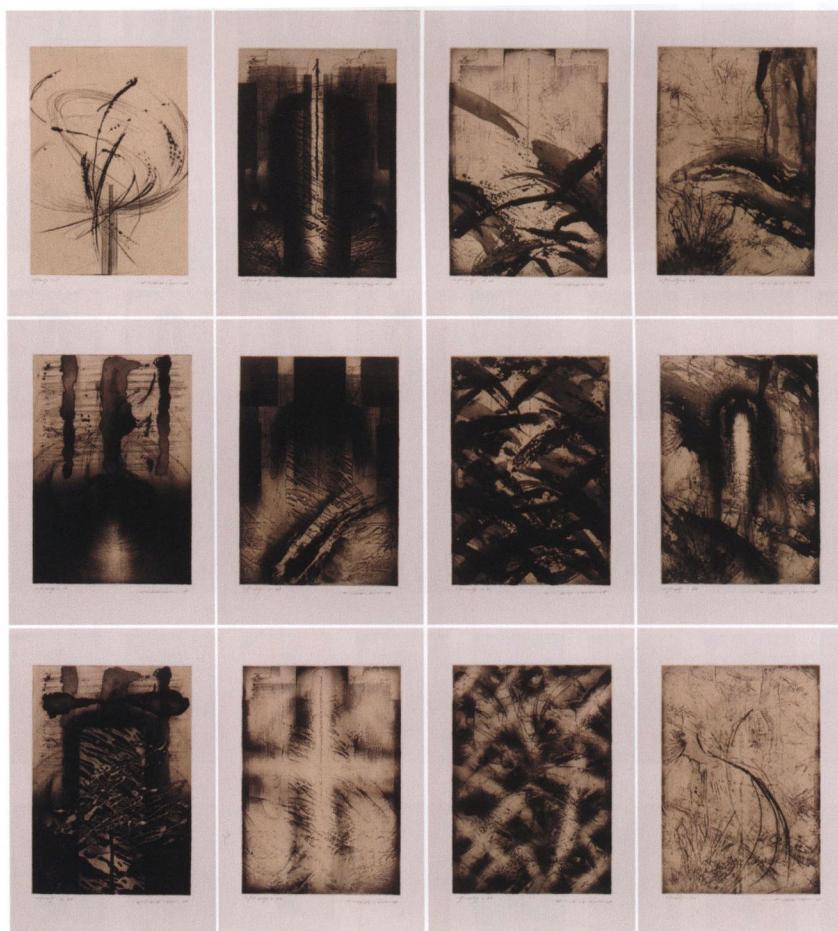
制作上の特性。それは作品の制作過程が記録できる点である。

銅版画の原版になる銅板の表面は銅鏡に使えるほどキズもない平坦な状態から腐蝕や描画が加えられ様々な凹凸のある原版へと変容する。作品の完成までに何回かの試し刷り（テストプリント）が行われ、版の途中経過が確認される。版画を含む全ての完成作品は作者の手や思考の痕跡の堆積結果であるが、版画はその各断層を刷り取り記録として残すことが出来る。それは作者の思考断面の記憶であり、瞬間的時間の記憶である。一枚の版上では作者の様々な思考による行為が出現しながら、思考と行為の瞬間が折り重なって行く。『版』は制作のその瞬間を記録する「特性」を持つ。

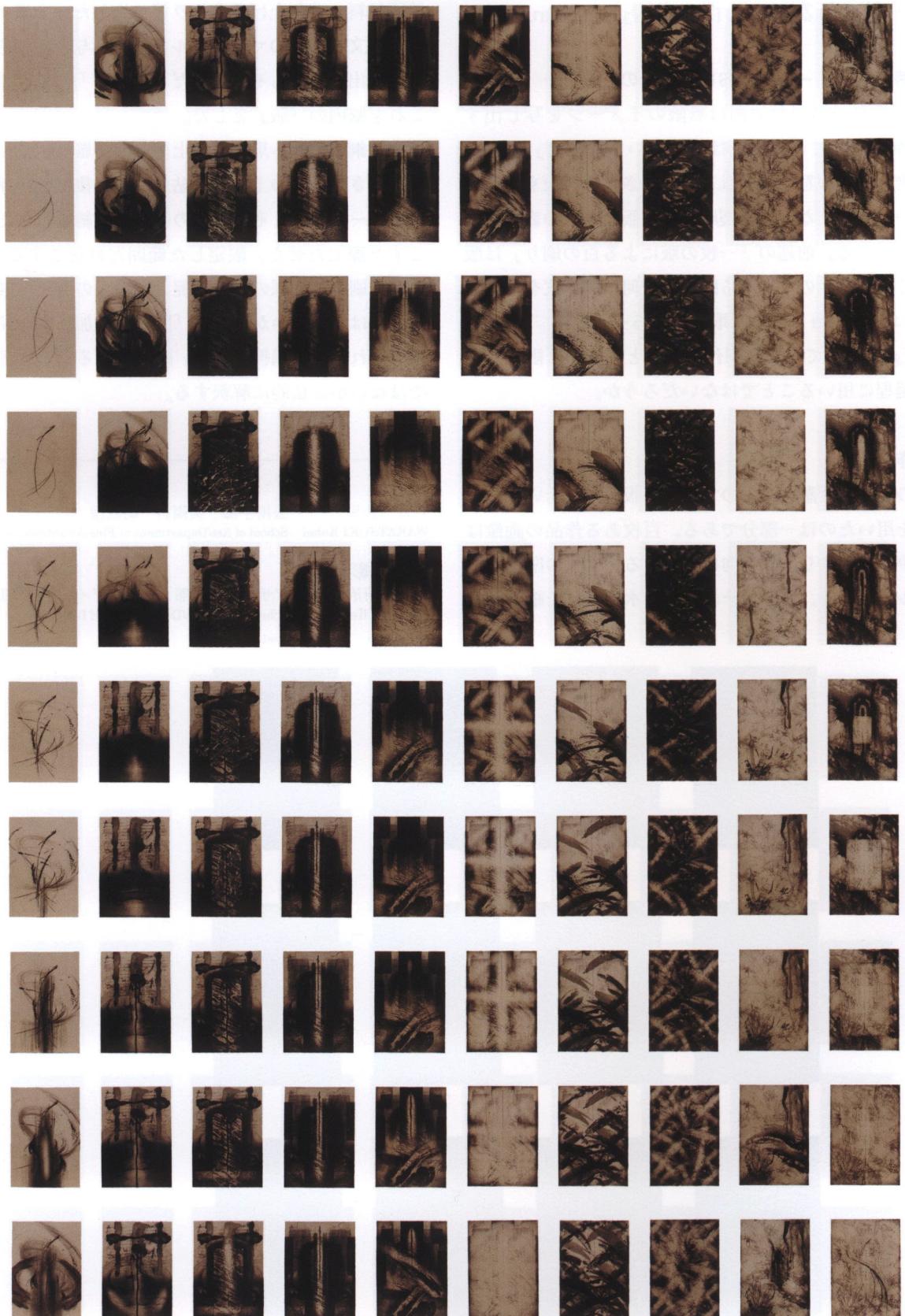
＜制作方法＞

一般的に作品は下絵、エスキース、作者の図像的構想がありその頂上に向かい制作が進められ完成が存在する。この作品はエスキース、構想を一切持たず一枚のまっさらな銅版に向かい、その瞬間の精神状態、身体的衝動に任せ手を動かし版に行行為を及ぼす。ある程度進んだ時点で紙に刷る。一枚目の刷り上がりを観、それから受けた印象を基に次の行為を版に加える。それを百回繰り返した。

期間は2ヶ月に渡り、その時々の精神状態の違いにより当然作品の推移は脈絡の薄いものになる。その百枚を一堂に並べることで2ヶ月の時間経過の蓄積をそこに展開し留め、それぞれの断面を提示すること目的とした。



「一枚の版による百の痕跡」 2005年
1枚40.0×30.0cm、100枚組の部分12枚
紙にエッチング、アクアチント、ドライポイント、雁皮刷り



One hundred traces on one plate 2005
 1 piece 40.0×30.0cm 100pieces
 etching, aquatint, dry point, on ganpi paper

百面透写 畫意の痕跡
 1枚 40.0×30.0cm 100枚
 鋼版画、アカツキントウ、ドライポイント、ガンピ紙

3.「一筆の行為による百の表情」副題「tsuru-2005」

私の解釈『版』—脳内における無形の『版』—

版画用紙の純白な表面は無限のイメージを写し出す可能性を秘めている。紙は原版という「限定」によって作者の表現が写し出される。まっさらな銅板も無限のイメージを蓄えながら、製版された版は作者の表現として限定される。前述の「一枚の版による百の刷り」は版という「限定」の中で刷る瞬間で如何に自由度を持って100のエディションを刷り取るかであった。

『版』を以って作品を制作することはある「限定」を制作過程に用いることではないだろうか。

<制作方法>

この作品は所謂一点ものであり、版画ではない。版画技法を用いたのは一部分である。百枚ある作品の画像は全て中央上部より下部に向けて延びる一文字の凹凸マチエールだである。このマチエールは水張りした紙の上に

絵画材料の盛り上げ剤をヘラ等で施した。上部より下部への一文字だけのマチエールを画面に与え、手を動かす指令を出す脳にもその行為だけをする「限定」を課した。これを脳内の『版』とした。

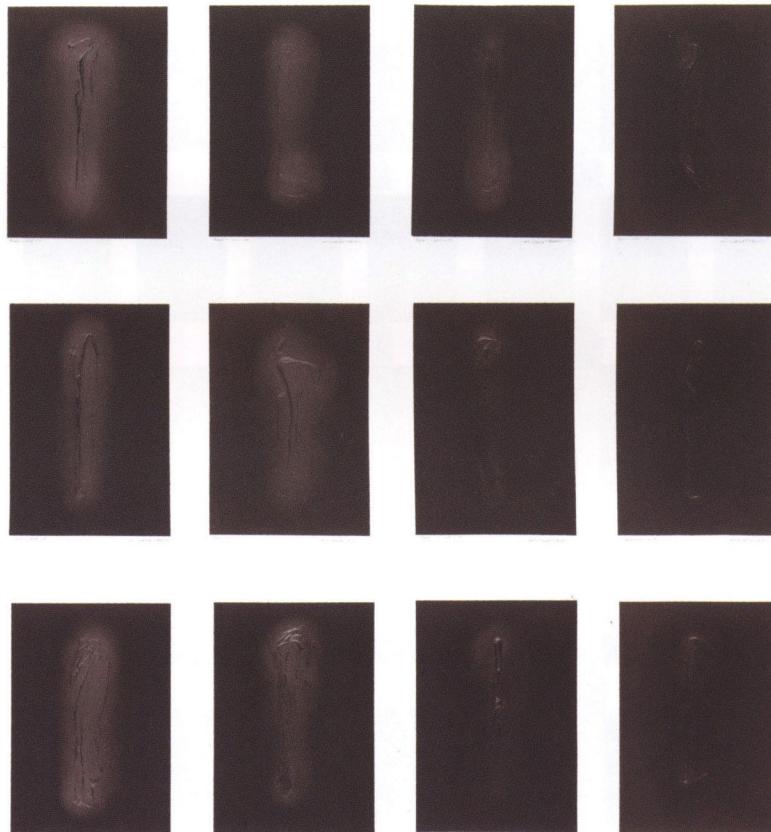
次に銅版で真っ黒に刷り上げた薄い雁皮紙をマチエールの施された紙の上に糊で貼り、乾燥後凹凸が浮き出るマチエール部分とその周辺のみを脱脂綿に付けた黒鉛でこすり際立たせた。限定した範囲だけをこする行為は、版画の刷りと同様のものと捉えた。この百枚は厳密には版画とは言えないが、ある「限定」が加わり作品が完成に導かれる制作過程は『版』画に準ずるものと言えるのではないかと私的に解釈する。

執筆者

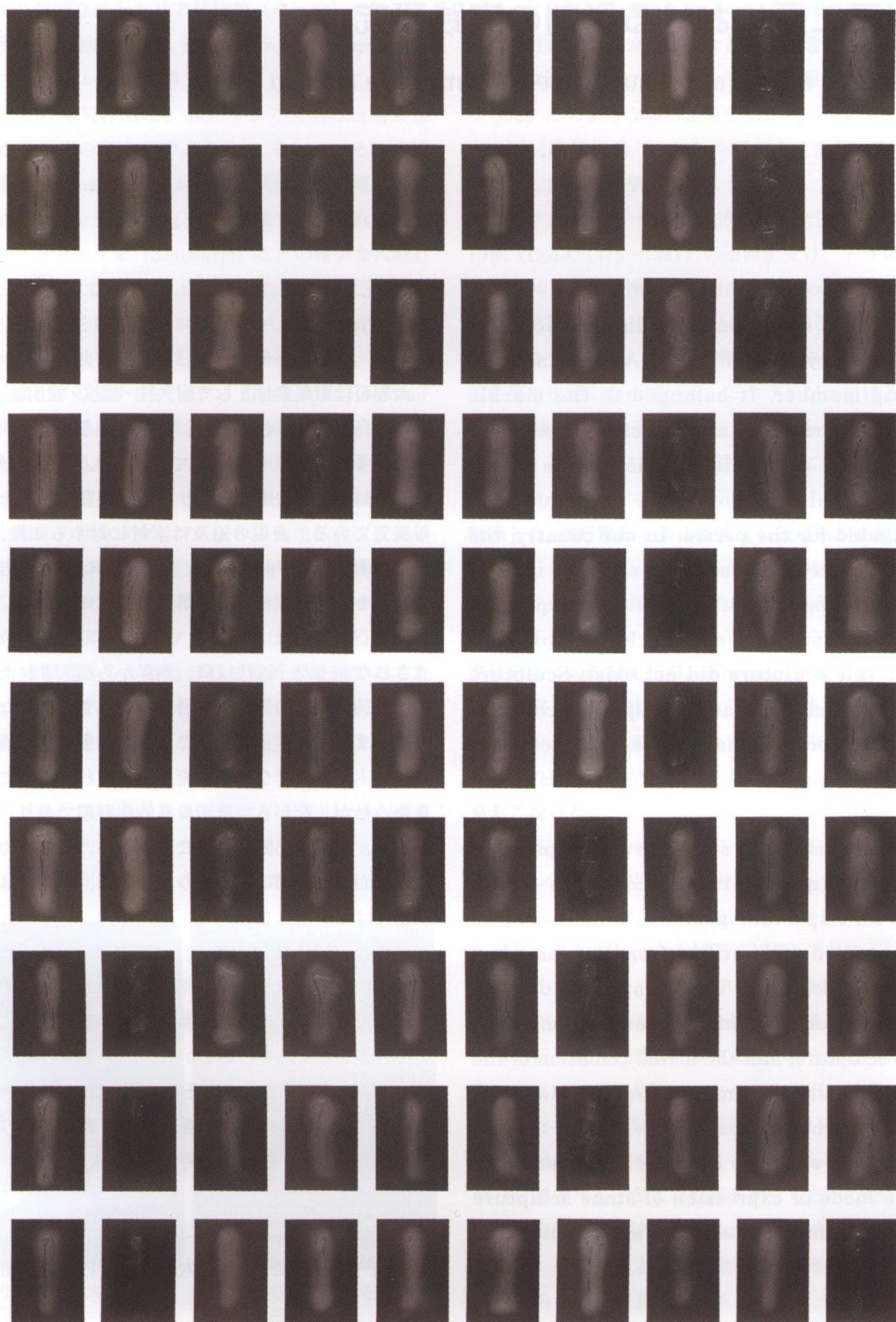
若月 公平 芸術学部 美術科 助教授
WAKATSUKI Kohei School of Art/Department of Fine Arts/Associate Professor

写真撮影者

倉田 研治 デザイン工学部 情報デザイン学科 助手
KURATA Kenji School of Design/Department of Informatique Design
Assistant



「一筆の行為による百の表情」 2005年
1枚40.0×30.0cm、100枚組の部分12枚
紙にアクアチント、鉛筆によるフロッタージュ、雁皮貼り



One hundred expressions from one stroke 2005

1 piece 40.0×30.0cm 100 pieces

aquatint, rubbing with pencil on ganpi paper